



第48回

健大高崎元コーチ 狙うは夏の甲子園

※2024年6月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘していただきます。

1 / 3

第96回選抜高校野球大会（毎日新聞社など主催）で優勝した健大高崎高（群馬）のコーチ兼副部長だった赤堀佳敬さんが、4月から静岡県磐田市の磐田東高監督に就任した。盛岡大付高（岩手）や健大高崎という甲子園常連校でのコーチ経験を生かし、今月30日に開幕する全国選手権群馬大会で甲子園出場を目指す。

赤堀さんは静岡県三島市出身。伊豆中央から中京大へ進み、内野手としてプレーした。大学卒業後に体育の講師として赴任した県立磐田南高でコーチを務めた後、2017年から盛岡大付、19年から健大高崎で主に打撃を指導。両校で甲子園出場を春夏通算6回経験した。

磐田南野球部は、夏は11年の静岡大会準優勝が最高成績。赤堀さんを監督に迎え入れた石川佳彦校長は「ベテラン監督という選択肢もあったが、若くて甲子園に精通した赤堀先生なら『磐田から甲子園』の目標を達成してくれると思った」と期待を賭ける。

健大高崎は3月31日のセンバツ決勝で、報徳学園高（兵庫）を3―2で破って初優勝。赤堀監督は閉会式後のグラウンドで選手らに胴上げされた後、翌4月1日午後には群馬県高崎市に帰った。

4月3日にマイカーで300キロ以上を走って、午後3時ごろに新しく借りた静岡県袋井市内のアパートへ。4日は朝から磐田東で職員会議に出席し、着任のあいさつ

をした。5日には上京し、親交のある元プロ野球ヤクルト選手、監督の宮本慎也さんと夕食をともにして優勝を祝福された。宮本さんからは以前から「監督になるチャンスは、なかなか無い。大変なこともあるだろうけれど乗り越えれば大きな財産になる」と激励されていたという。

磐田東の野球部員との顔合わせは7日。選手らは前日、前任監督の基で春季東海地区大会静岡県地区予選を勝ち上がり、同20日からの県大会進出を決めていた。初采配までちょうど2週間。最初の1週間は宮本さんの助言に従い、黙って見守った。次の1週間は「走塁は短期間で一番変わるから」と、離塁・帰塁のタイミングなど走塁の基本を教えた。

磐田東は21日の県大会2回戦から登場し、静岡学園高に10―0で五回コールド勝ちして、夏の静岡大会のシード権も獲得した。エースの寺田光（3年）が完封して1番打者の堀場稜司（同）は3安打

3打点。先制の2点適時三塁打を放った4番の吉沢誠基（同）は「内角低めの真っすぐ。完璧な当たりで、取れるところで点が取れてうれしい」と喜んだ。

しかし、試合後の赤堀さんは厳しかった。球場外の駐車場で円陣を組むと「吉沢も堀場もナイスバツティングなんだが、ボール球は見送ってほしかった」と切り出した。「相手投手のレベルが上がる。とそんなに打てなくなる。（余計な球数を投げ、打者に）有利なカウントで攻めない。そこを我慢できれば、いい選手になれる」とアドバイスした。浅井雄亮主将（同）は「いい投手がいるので守り勝ち、走塁を絡めて点を取りにくい野球をしたい」と話した。

27日の3回戦では、伝統校の静岡校に2―4で競り負けた。赤堀さんは「夏に向けて課題が浮き彫りになった。走塁、守備、打撃など細かい点を詰めて底上げを量りたい」と前を向いた。

盛岡大付・関口清治、健大高崎・

青柳博文面監督から学んだことは

「選手の長所を生かす」。恩師2人の監督就任年齢が自身と同じ31歳だったことにも「運命を感じる」と赤堀さん。「甲子園で恩返しをしたい」と、両校との対決を夢見る。